

聖書に親しむ

2021年 聖書週間 (11月21～28日)

テーマ：家庭—試練や苦境における喜びの源

2021.11.21

カトリック中央協議会

〒135-8585 東京都江東区潮見 2-10-10

TEL03-5632-4445 FAX03-5632-4465

郵便振替 00130-6-36546(宗)カトリック中央協議会一般会計口

巻頭言

聖書を持ってミサに行こう

カトリック長崎大司教区補佐司教
ペトロ 中村 倫明

皆さんは、ミサに祈祷書を持って行っておられますか？

大抵の方は、持たずに、あるいは持参なされても、バッグや服・ズボンのポケットに入れて行っておられることでしょう。とある教会のMさん(70代男性)は、手に握って毎朝のミサに通っておられます。その彼が分かち合ってくれました。

「朝早くから歩いているわたしを通りの人は不思議そうに眺めます。本を手に持っているのを見て『散歩ではなさそうだが』と、さらに奇妙そうな顔をして尋ねる人もいます。『手になんば持つととね。どこに行きよるとね。』その時には『祈りの本ですばい、教会のミサに行きよるとですよ。』と答えます。尋ねられなくても、祈祷書に人々が気付くように、わざと手に持って、教会に行くんです。」

Mさんは「教会においでになりませんか」と積極的に自分の方から声を掛けていくような方ではありません。ごく普通というよりも、とてもシャイで控え目な人です。それでも、彼なりの宣教を行っておられるのです。

長崎では、「聖書愛読運動」と銘を打ち、各小教区のやり方で、信徒の皆さんに「聖書に親しむ」ことをしてもらおうとしています。わたしはMさんからヒントを得て、赴任した教会で呼びかけました「マイ聖書を教会に持ってきて、ミサの聖書朗読の箇所は、パンフレットではなく、聖書を開いてみ言葉を味わいましょう。できれば、聖書をバッグに入れないで、人々にちゃんと見える形で手に持って教会においでになったらどうでしょうか。」



案の定、いろいろな意見がでました。「重い聖書を持ってくるのは大変だ」「小さい聖書だと字も小さくて見えない」「そこまでせんでもよかとじゃなかと、パンフレットがあるとやけん、それを見れば十分よ」な

ど現実には難しいものでした。それでも、マイ聖書を今でも持参し、聖書を開き、感じたみ言葉には線を引いたり、思ったことや説教での話をみ言葉の横やノートに記すことを続けておられる方もいらっしゃるようです。

「長崎は祈祷書を大切にしている伝統がありますが、同じくらいに、わたしたちみんながマイ聖書を教会に携えてきて、教会の中でこそ、あるいは家で開いていない人は教会の中でだけでも開いていくとき、行き詰っているわたしたちの信仰の世界も開き始めていくのではないか。」そんな思いがある人に話したら「司教様、今はスマホで全聖書を見ることができんです。スマホで十分です。」と言われました。

イエスさまはわたしたちの救いのために重い十字架を手放すことなく最後まで背負って歩いてくださいました。それに比べ、わたしたちは聖書や信仰を重く感じ、それらをますます軽く薄く簡単にしています。

「スマホ1つで何でもできる便利な世の中。スマホを肌身離さず大切にしても、その中の聖書を抱きしめ大切にしているわけではありません。かえって他の便利で夥しい情報おびただの洪水の中に埋没させられ、み言葉は死んでいるかもしれません。スマホや本棚などに閉じ込めないうで、自分も他人も気付くように、手に持って運ぶ聖書こそ必要ではないでしょうか。」

皆さま方、聖書についての分かち合いもお願いします。

養成する共同体になるように

聖ザベリオ宣教会司祭 レナト・フィリピーニ

エフライムの腕を支えて
歩くことを教えたのは、わたしだ。
しかし、わたしが彼らをいやしたことを
彼らは知らなかった。
わたしは人間の綱、愛のきずなで彼らを導き
彼らの顎から軛を取り去り
身をかがめて食べさせた。(ホセア 11・3-4 節)

テキストを理解する

旧約聖書における神とイスラエルの関係は、しばしば「契約」という語で表現され、相互に義務を伴うものでした。しかし、イスラエルは神との契約を守らず、何度もそれを破棄してきました。ホセア書 11 章は、そのような時の状況を反映していますが、神の民への誠実さが、契約自体への誠実さを上回る事が明らかになる聖書箇所の一例です。実際、この章を読むと、選ばれた民という概念の原点が「神の愛」にあることがよくわかります。

具体的に見てみましょう。1 章から 3 章にかけては、神と民との関係を夫婦関係になぞらえて表現していますが、11 章では父と子の関係に変化しています。預言者は、神に代わって、神の愛を認めなかったイスラエルの人々の鈍感さを嘆いているのです。そこにあるのは、子どもの成長に寄り添って見守る優しい父親の姿です。また、神は不忠実な民を罰する権利を持っているにもかかわらず、その権利を放棄し、回心を待たずに民をゆるすのです。

テキストと対話

教皇フランシスコの書簡『父の心で』を通して、イエスの養父であるヨセフの存在と大切さを再認識できたことでしょうか。イエスが教えた「主の祈り」は、神に向かって「父よ」と呼びかけますが、聖書の祈りが「父よ」で始まることは当たり前ではありません。150 編の詩編の中でこの表現で始まるものは一つもありません。この表現の背景には、幼子イエスの体験が反映されています。

福音書では、イエスは神との関係を常に「父」と扱っ

ています。ルカ 2 章 49 節を見てみましょう。イエスが 12 歳の時、神殿にいるところを両親に見つけられた際、「どうしてわたしを捜したのですか。わたしが自分の父の家にいるのは当たり前だということを、知らなかったのですか。」と 2 人に言いました。また、23 章 46 節では、この地上での最後の瞬間、十字架上で「父よ、わたしの霊を御手にゆだねます。」と大声で叫びました。養父であるヨセフへの呼びかけではなく、神への呼びかけに「父」ということばを用いているのです。

福音書には、ヨセフのことばは記されていません。ヨセフの姿は「影に見る父」の存在です。教皇フランシスコが「だれかの人生に対する責任を引き受けることはつねに、その人に対し父として振る舞うこととなる(『父の心で』 7)」と書簡に記したように、血のつながりがあるうとなかろうと、見守る存在であるということが強調されているのです。

テキストを生きる

親の使命が子を育てることなら、信仰共同体の使命は受洗者をキリスト教的生活に導くことです。宣教司牧活動における評価基準は、年間で何人に洗礼を授けたかという「生産基準」であってはいけません。受洗者を成熟した信仰まで導く「養成基準」であるべきです。幼子が乳離れしても、成人になるまで養育が必要であるように、三つの入信の秘跡が授けられたとしても、キリスト者として成長するための養成は始まったばかりなのです。

今年 5 月に、信徒のカテキスタに関する教皇自発教令“Antiquum ministerium”が公布され、洗礼の秘跡の準備のみならず、生涯養成までもが果たすべき奉仕であるとされています。キリスト教の歴史において、カテキスタは縁の下の力持ちといえる存在で、惜しみなく献身的にキリストとの出会いに導き、キリスト教的生活を送るよう能力を与え、信仰共同体を支えてきました。これからも、この必要不可欠な信徒による奉仕が継続されるために、小教区から大司教区までが一体となって養成する共同体を目指し、環境を整えて常に人材を育成することが重大な使命なのです。

よりどころに立ち帰る

シャルトル聖パウロ修道女会 Sr. 加藤 美紀

私たちの心の奥底には神の愛の聲が響いています。聖書を読むと、その響きがかすかに聴こえてきます。神の愛がこだまする聖書に親しむことによって、人生は変わります。

使徒職の同僚は、通勤の車中、スマホで聖書朗読を聴くそうです。クリスチャンではありませんが、黒人文学の研究者で、作品の背景理解のために聖書を耳で聴くうち、「聖書に流れるスピリットに触れて、生きる力を汲み取れた」といいます。

何事も頭で考えがちで、聖書を難しく感じていた信徒の方は、福音書を音読してみたら、「イエス様の心がすーっと入ってきた」そうです。彼女はそうして大病を乗り越えました。

私自身は終生誓願宣立の半年前、眼科で脳腫瘍の疑いが見つかり、全ての検査結果が出揃うまでの1カ月余り、ミサ典礼の御言葉が心の奥に響き、「死が襲い始めると、神を捜し求め、神がよりどころであることを思い出した^註」（詩編78・34）をそのまま体験しました。

私たちの存在のよりどころが愛の神であると知るのは、病気の時だけではありません。日頃、学生と話していると、無二の親友やかけがえのない大切な人との別離が、他では埋めることのできない危機的な喪失体験となることがわかります。生きる支えを失い、「自分の一部を喪^{うしな}った」と嘆く若者を前に何が言えるでしょうか。

人は誰しも真実の愛に飢え渴き、愛の源である神

だけが満たすことのできる空洞を抱えているようにみえます。その空洞は誰も侵すことのできない聖域です。この聖域を偽物で埋められるという錯覚に陥らないように、聖書に親しむと何が起こるでしょう。物語を読むように聖書を読み、おはなしを聴くように聖書を聴く。そのうち聖書は私たち一人ひとりの人生の物語の中に織り込まれてゆきます。

聖書は物語の宝庫です。罪とゆるし、病といやし、喪失と再生、危機と希望、抑圧と解放、対立と和解…。ありとあらゆる人間のドラマが聖書の中にあります。それら全てが「神の愛による救い」という一貫した筋立てのもとに、「神の国の実現」という終末の完成に向けて展開する壮大な救済物語です。聖書に見受けられる謎めいたエピソード、解釈に戸惑うたとえ話も、教皇フランシスコが「いのちの織物」と呼ぶ物語、即ち、生きとし生けるもの全てを慈しみ、誰一人例外なく救おうとされる神の救いの物語の文脈に置くと、理解の助けとなるでしょう。

最後に、コロナ禍が露わにした不条理の中で、信仰によって人間の理解を超えた現象を受け入れ、不可解な出来事にも意味を見出しながら、御旨を実現した聖ヨセフを思い起こします。聖人に倣い、私たちが先行き不透明なこの世の旅路で、聖書を貫くスピリットに触れて原点回帰し、存在のよりどころである愛の神に立ち帰ることができますようにと心から祈ります。

注：典礼委員会詩編小委員会訳『詩編』参照

聖書週間 2021 11.21 ▶ 28

ムリーリョ「小鳥のいる聖家族」 プラド美術館（スペイン）

家庭一試練や苦境における喜びの源
Home - Source of joy in trials and difficulties

わたしはエフライムに歩くことを教え、身をかがめて食べさせた（ホセア 11・3-4 参照）
Yet I taught Ephraim to walk, and I bent down to him and I fed him (cf. Hosea 11・3-4)

聖書週間

2021 11.21 - 28



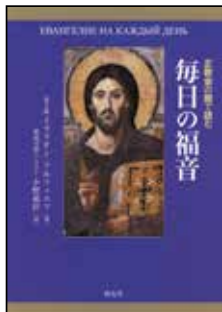
家庭一試練や苦境における喜びの源

良書のすすめと読み方

① 正教会の暦で読む 毎日の福音 イラリオン・アルフェエフ 著 小野成信 訳

2021年 教友社 3600円+税

ロシア正教会の府主教であり、指導的の神学者の一人である著者によって書かれた福音書の講話集です。全354話が収録されています。東方正教会の伝統と霊性に立ちつつ、信徒にも分かりやすいように霊的な視点によって四福音書を解説しています。講話は正教の典礼暦に従って収録されていますが、巻末の索引を利用すると、調べたい福音書の箇所を探することができます。また、正教会用語と一般の表記との対照表もあり、なじみのない人にも使いやすくなっています。現行で唯一入手可能な正教会の福音解説書。信仰生活を見直す道しるべとして最適です。



② 主日の聖書解説<C年> 雨宮 慧 著

2021年秋 再版 教友社 2000円+税

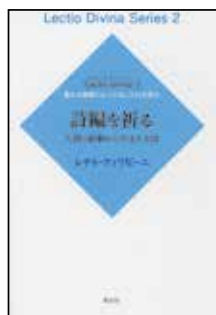
主日のミサで朗読される三つの聖書箇所（旧約聖書、使徒書簡、福音書）の基本的な意味や時代背景を明らかにし、各書の相互関係に重点をおきながら、その日読まれる聖書全体のメッセージを浮き彫りにします。——ミサの準備、個人の聖書の学びにうってつけの一冊です（全3冊）。〈A年〉（マタイ）と〈C年〉（ルカ）は一時期品切れでしたが、〈C年〉はこの秋に再版されます。〈A年〉も2022年に再版の予定です。〈B年〉（マルコ）は現在入手可能です。旧約聖書を含めた聖書全体をバランスよく学びたい方にはお勧めのシリーズです。



③ 詩編を祈る —人間の経験から生まれる詩— レナト・フィリピーニ 著

2017年 教友社 1000円+税

「レクティオ・デイヴィナ」とは伝統的な聖書の読み方であり、「聖なる読書」と言われ、神ご自身と出会うために読むことを意味します。本書では、150編の詩編から重要な24編が厳選されているので、それを学ぶことによって、深い黙想や祈りへと向かわせてくれます。どの詩編も極めて重要な箇所ですので、詩編入門としても読むことができます。「詩編はヘブライ語で『テヒリム』（賛美）ですが、詩編は『賛美』では終わらず、祈りであり、告白です」（雨宮慧神父様推薦文）。詩編を賛美として歌うことができるように、その本質を学ぶことができます。



④ 日々の暮らしの中で —信仰を育て、実践する— レナト・フィリピーニ 著

2020年 教友社 1000円+税

「レクティオ・デイヴィナ・シリーズ」の3作目。福音書の教えの中でもとくに大切な「主の祈り」と「八つの幸い」（真福八端）を中心に、み言葉を学び、味わいます。祈りとともに信仰生活を生きるための黙想・観想のガイダンスです。一人でみ言葉を学んで霊的生活を基礎づけるためにも役立ちますが、「グループで行うレクティオは、全員がイエスのみ言葉に生かされ、その喜びを周りの人々に伝えるように変容させていきます」（白浜満司教様推薦文）とあるように、教会での学びにも最適です。霊的な共同体を作り上げるために。



◆編集後記◆

間もなく12月8日で終わる「ヨセフ年」、3月19日に始まった『「愛のよろこび」家庭年』を受けて、今年のテーマを「家庭—試練や苦境における喜びの源」としました。幼子イエスを育て、家族を支えたヨセフ様から、家庭を拠りどころとした信仰教育、家族の支え合いについて思いを巡らしています。コロナ禍でミサや種々の集まりが制限されている状況の中で、家庭も教会も困難に直面しています。み言葉によって養われ、力づけられて、苦境を乗り越えていくことができますように。

◆献金のお願い◆

この「聖書に親しむ」は無料で配布しておりますが、諸経費を含め聖書に関する活動のためにご寄付いただければ幸いです。その際は、下記へご送金くださいますようお願いいたします。

振込先： 郵便振替 00130-6-36546 (宗)カトリック中央協議会一般会計口